

9. 発達障害を強く疑ったものの愛着障害と診断変更し症状の改善がみられた一例

福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

千代田高明, 板垣俊太郎, 佐藤亜希子
横倉 俊也, 和田 知紘, 小林 有里
坪田 朝子, 三浦 至, 矢部 博興

福島県立医科大学医学部小児科学講座

鈴木 雄一

愛着障害とは、療育者との愛着形成が何らかの理由で形成されず、子供の情緒や対人関係に問題が生じる状態である。励ましても効果のない恐れや過度の警戒が特徴的で、友人との社会的相互交流の乏しさ、自分自身や他者への攻撃性、自己肯定感の低下が見られる。症状の表出として発達障害と疑われることもあるが、療育環境の調整が治療の本質であるため、鑑別が重要である。今回、初診時行動特性から発達障害を強く疑ったものの学校関係者への聴取により愛着障害と診断変更し症状の改善がみられた一例を経験したため愛着障害の鑑別や対応、経過等を含めて報告する。

症例は9歳男児。学校での情動の制御困難や暴力行為、融通の効かなさ、授業への集中困難、多動といった不適応があり、学校から受診を勧められ当院を初診された。健診等において成長発達面での異常は特に指摘されなかったものの、幼稚園では多動・衝動を疑うエピソードが見られていた。初診時の本人は診察室への入室を拒否し、母親の後ろに隠れ視線も合わせない様子であり、別室での対応となった。母親からの病歴聴取では、学校と家庭での易怒性や多動・衝動エピソード、こだわりの強さや対人交流の困難さ、自己無力感の表出が確認できた。そのため自閉症スペクトラム障害と注意欠如・多動性障害を強く疑い、外来診療を開始した。再診時は診察への拒否的な様子は見られなかったものの、椅子を回すなど常に落ち着きのない様子であった。

ところが、その後学校関係者との面談において、学校場面でのトラブルの詳細や本人の発言のみならず、養育環境として母の過干渉と、父の児に対する無関心が判明した。更に、母の仕事負荷が増大するにつれて本人の易怒性や情動不安定さが悪化することが確認された。そのため愛着障害に診断を修正し母に対して児への対応のアドバイスを施したところ、児の問題行動は次第に改善傾向にある。尚、この発表は福島県立医科大学の倫理委員会の規定に基づき、個人情報に関する守秘義務を遵守し、匿名性

の保持に十分な配慮を行った。

10. 「地域とのつながりを意識したデイケアプログラムとその効果」～交流と楽しさでリカバリーにつなげる～

医療法人すこやか ほりこし心身クリニック

保科 輝之, 佐藤 孝洋, 宗像 千紘
石山あかね, 千田 理恵, 堀越 翔

キーワード：デイケアプログラム リカバリー
インターフェイス

【はじめに】

患者様が安心して居る場所として役割や疾患の管理・問題解決・コミュニケーション系のプログラムを中心に行っている。ただ、実際それだけでは、患者のリカバリーが十分に促進されないと思いがあった。そこで、医療と地域とのインターフェイスを意識したプログラム導入し得られた効果をここに報告する。

【目的】

当クリニックのデイケアに参加しているメンバーは、社会復帰にむけて通所している方が多く、社会とのつながりは疾病からの回復過程においても大きな影響力を持っている。

そこで、デイケアという集団の力（グループダイナミクス）を利用し、メンバーがそれぞれの社会復帰につながることを目的としている。

【活動内容・経過】

福島市で行っている販売会へクリニックデイケアとして初めて参入した。その経験からデイケアからステップアップとしてB型に移行するメンバーも出た。

ユニバーサルスポーツとして普及しているポッチャで定期的に交流会を行っている。今年は予選会を突破し、福島市初めて開催する「第1回福島市長杯ポッチャ大会」出場した。クリニックのデイケアでポッチャ部を創設した。

このほかにも、デイケアから地域への情報発信として、地域のクリーン活動プログラム、プログラム内で作成した商品の院内販売会、地域のスポットをめぐるお出かけプログラムなどを行った。

【まとめ】

こういったプログラムを導入したことにより、メンバーが抵抗なく地域との交流に参加するようになり、病状が安定し早期の社会復帰という形でメンバーのリカバリーが形成されていった。